

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 6 日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520064

研究課題名(和文) 中世初期南都僧と禅宗の交流に関する思想的研究

研究課題名(英文) Ideological study on the relationship between Zen school and Southern monks in Early period of Medieval era

研究代表者

菟輪 顕量 (MINOWA, KENRYO)

東京大学・人文社会系研究科・教授

研究者番号：30261134

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,200,000円、(間接経費) 660,000円

研究成果の概要(和文)：中世初頭、禅宗が南都の法相宗、律宗、華嚴宗にも影響を与えたが、それは東福寺円爾辨円の臨済系の禅であり、その中心に永明延寿の著作である『宗鏡録』が存在した。東大寺戒壇院の円照、凝然などの諸僧及び生駒竹林寺の良遍に影響が顕著に見られる。良遍は『真心要決』で見聞覚知があっても認識のない無分別智の境地を覚りの境地とし、それを禅の本来固有の本有仏心であると捉えた。

円照は伝記資料に残された否定的な表現から禅的な理解が確認される。凝然は初期の『日珠鈔』から晩年の『華嚴宗要』に至る過程で、妄心よりも真心を強調する傾向に展開し、華嚴の行として頓悟頓修を認め諸行が是認されるが、それも『宗鏡録』の主張と一致する。

研究成果の概要(英文)：Zen School gave influences to Hosso, Ritsu and Kegon schools in the early period of Medieval Era, and its Zen thought was that of Rev.Enni, Rinzai school, in Tofukuji temple. The Sugyoroku written by Eimeienju was the most influential text in this movement. Rev. Ensho and Gyonen were most remarkable monks who received the profound influences of Zen school. Ryohen considered the Non-discriminating Cognition which has the function of Perception but not Cognition as an enlightened mind, and he considered it as equal with the Zen's honnu-busshin.

In the case of Rev. Ensho, we know the Zen school's influence through negative expressions in his biography. In the case of Gyonen, comparing his early age's writing Nisshu-sho and late age's writing Kegonshuyo, we know his ideological change that he came to emphasize the True Mind than the defiled mind. He admitted Sudden Enlightenment and Sudden Practice, meaning that he admitted all practices. This is very similar to the thought of Sugyoroku.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学・中国哲学・印度哲学・仏教学

キーワード：円爾 良遍 円照 凝然 真心要決 華嚴宗要 華嚴法界義鏡 宗鏡録

1. 研究開始当初の背景

中世初頭に達磨を初祖とする禅宗が日本に伝播した。大陸に渡った僧侶が当地で隆盛を極めつつあった禅宗に触れ、日本に持ち帰ったのが最初であるが、それは天台の覚阿(1143-?)や栄西(1141-1215)を嚆矢とするものであった。

新来の禅宗は上記の僧侶を介して各地に紹介されたのであるが、高野山にも伝えられた。高野山における禅宗の影響は、若手研究者の田戸大智によって先鞭が付けられていた。一方、南都においては、法相の良遍(1196-1252)が正面から禅と法相の異同を示した著述を残していた。本書は本人自筆の原本が現存するにも拘わらず、写本を用いた本格的な研究は、その難解さの故にまだ行われていなかった。

また南都には円爾弁円(1202-80)の禅の影響があったとされるが、その影響とはどのようなもので、具体的に何処まで及んでいるのかを明らかにする研究はなかった。それは東大寺戒壇院に活躍した僧侶である円照(1221-77)や凝然(1240-1321)の場合も同様であった。中世南都を代表する僧侶たちへ与えた禅宗の影響は、具体的な形ではまだ十分に解明されていなかった。このような状況に鑑み、13世紀から14世紀の南都に焦点を当て、禅宗の影響を考察する必要があると考えた。

2. 研究の目的

禅宗が中世南都の僧侶たちに与えた影響を明らかにすることを第一の目的とした。考察対象とする中心的な人物を良遍、円照、凝然(そして若干遅れる人物であるが志玉(1383-1463)にも)らに絞り、彼らに対する禅宗の影響を明らかにすることを目指した。

当時の僧侶世界は、学侶と堂衆に大きく二分されていたことが既に明らかにされているが、学侶の中からも禅に関心を持つ僧侶が現れていた。その代表が12世紀末から13世紀初頭では解脱貞慶(1155-1213)であり、13世紀に入ると良遍であった。とくに良遍は達磨禅と法相宗の異同を吟味し、『真心要決』を著していた。本書は現今の刊本、大正新修大蔵経、日本大蔵経などに収録されたものは、前抄及び後抄(本末の2巻に分かれる)の3巻本であるが、自筆本は一巻しか伝わって居ない。巻数の相違を含め、良遍が何を参考にしながら、本書を執筆したのか、またそこに主張された思想内容はどのようなものであったのか、何が異同として意識されたのかを明らかにすることをまずは最初の目的とした。

次に南都を鳥瞰した時に重要な人物は戒壇院に活躍した僧侶たちである。当時、宗学と実践をリードしたのは遁世門の僧侶たちと考えられることに鑑み、彼らにおける禅宗の影響を明らかにすることを目指した。戒壇

院は遁世門を代表する院家であり、13世紀初頭には円照、その弟子に凝然、そしてしばらく後には志玉を輩出しているが、彼らにおける禅宗の影響を明らかにすることを目的とした。

3. 研究の方法

写本の存在するものは写本を集め、異読の有無を精査し、経論の引用はその典拠を大蔵経等の叢書を用いて確認するという極めてオーソドックスな文献学の方法による。まず13世紀の奈良における修学の状況を明らかにすることから始めたが、当時の僧侶は学侶と堂衆に別れ、かつ法会を中心に活動する交衆と、そうではない遁世門に分かれていた。中心部に交衆が、周縁部に遁世門が存在するのであるが、まず交衆の世界における活動と教理的な研鑽を明らかにするべく、東大寺図書館に残る『法勝寺御八講問答記』なる写本を検討した。まずは論義に関する記録から、論争の具体的な根拠を明らかにし、またその特徴を考察した。これは、遁世門の僧侶と対比して交衆の営みにも禅の影響がないかを考察するための方法として採用した。

次に、良遍の『真心要決』を考察した。引用の典拠を確認する地道な作業を文献学的に行った。その際に自筆の原本(写真版)を底本として利用した。

次に円照の場合は残された本人の著作が存在しないので『円照上人行状』と言う伝記資料を主な対象としながら、そこに伝えられる円照の言動を調査し、禅の影響を考えるとこの作業を行った。

凝然にはあまりにも著作が多く、その検討はまだ不十分であることを認めざるを得ないが、凝然の初期の著作として名高い『梵網戒本疏日珠鈔』(以降、『日珠鈔』と略記)や『華嚴経』に対する主要な著作である『華嚴法界義鏡』『華嚴宗要』などの主要著作の読解を、典拠を確認しながら進めた。

南北朝から室町期にかけての戒壇院の僧侶である志玉の場合も、聞き書きとして伝わる資料(『五教章見聞』)や彼が注を施した『六輪一路注』を検討の対象として、その主張の背景を、典拠を確認しながら読み進めるとこの方法をとった。

4. 研究成果

『法勝寺御八講問答記』の考察から、13世紀の学侶の中に関心として持たれたテーマは教学に関わるものが多く、行の視点からのものは少ないことを確認した。ましてや禅宗の影響と想定されるような内容は見だし難い。学侶が考究する内容は天台、華嚴、法相、三論の教理的なものであって、それらは仙洞、宮中の最勝講という格式の高い法会でも同様であった。それらの法会においては、經典相互の主張の矛盾を如何に整合的に解釈す

るのかに重点が置かれていたと言わざるを得ない。

次に考察した良遍の『真心要決』は本研究の中心部分を占めるもので、良遍の見た禅宗と法相宗の主張の相違を明らかにした。本書は、薬師寺に本人自筆の原本が所蔵されていることが夙に知られていたが、今般、東京の国立博物館に寄託管理されていることを知った。本原本は現在の『真心要決』『前抄』に相当する部分のみであり、その形式から良遍が本書を執筆した段階では「後抄」を執筆する意図は無かつたろうことを推定した。

先行研究では良遍が自らの言葉で主張した内容の仏教学的な立場からの位置づけがなされていなかったが、今回の研究ではそれを明確にした。良遍はまず冒頭部分で覚りの有り様を「聞くとも聞かざるが如く、見ると雖も見ざるが如し」と表現するが、それは判断了別の働きが出現しない無分別の境地を表していることを明確にした。

また禅宗が目指している境地は、この無分別の境地そのものであり、それを人間の持つ知覚認識の働きであると位置づけ、それを「本有仏心」とするのである。ここに伝統的な「無分別智」と禅宗の主張である「本有仏心」とが重なることを明らかにした。

また、良遍は禅と法相の相違を五つの観点から自問しかつ自答する。一に「一心の体性」、二に「一切は無性」、三に「速疾に成仏す」、四に「一切は成仏す」、五に「止観の名言」である。なかでも興味深い点は、法相宗の中に伝持された因明の観点からの言及が見られることであり、覚りの境地は現量（直接知覚）であるとの見解を述べる点である。ここでも分別の生じない認識が覚りであると位置づけられる。

また本書で議論される問題に、すべての生き物が覚りを得ることができるという「一切皆成」説が登場する。この問題は、平安時代初期の最澄から続く関心事であり、楠淳證、西村玲を初めとする先行研究は、良遍も一切皆成説に与することになったと位置づける。しかしながら、この問題は思った以上に複雑な様相を呈しており、皆成説と言っても、それは限定付きの皆成説であることに注意しなければならない。実際には「一切皆成」と「速悉成仏」という二つの問題が立てられ、しかも法相宗の採用する教学的な理解である三性説と三無性説という二つの立場を明確に立て、場合分けをしている。つまり三無性説に立てば、「一切皆成」と言うことができるが、三性説に立てば「一切皆成」とは言えないというのが良遍の本来の立場であった。このように場合分けをしており、所謂、天台が主張する一切皆成説とは異なる。結局、良遍は伝統説を無視してはいず、決して純粋に一乗家の立場に立っているわけではない。なお、この立場は良遍が『真心要決』を述作した時点でのものであり、晩年の著作における理解は、別途、検討すべき課題であること

も意識されることになった（これは『真理鈔』との関わりで考察が必要であり、今後の課題の一つである）。

また、良遍が使用する用語の中に、依詮、遮詮、廢詮という表現が登場するが、これらは貞慶の『勧誘同法記』の中に見られ、しかもその典拠は『宗鏡録』であることを明らかにした。良遍は円爾弁円の『宗鏡録』の講説を風聞で知っていたと自ら述べるが、『宗鏡録』そのものは自ら見ていたと推測されることも明らかにした。

次に円照における禅の影響を明らかにした。円照が東福寺の円爾に学んだことは既に知られ、多くの先行研究も指摘するところである。凝然の書いた『円照上人行状』から、円爾に一夏の間、参禅したことが知られていたのであるが、具体的に彼の考え方のどこに禅宗の影響があるのかは明らかにされていなかった。『円照上人行状』の中には円照が、真言が長男、禅が三男と述べる譬喩的な表現が登場する。しかも禅宗は「目鼻あることなし」と表現されるのであるが、この表現は『宗鏡録』の中で意識された遮詮の表現である。

言語による肯定的な表現は依詮と呼ばれ、否定的な表現は遮詮、言語を用いずに表現することは廢詮と呼ばれたが（廢詮の用語は法相教学の中に登場する）、この三つの表現のうち、遮詮の表現形式が『円照上人行状』に描かれた円照の言動の中に見いだされた。おそらく円爾への参禅経験から、『宗鏡録』を直接に学び、悟境を遮詮で表現することを学び、「目鼻がない」という否定的な表現を用い、そこに判断了別の働かない無分別の境地を示そうとしたのではないかと推定した。

なお、円照は一般に戒壇院の復興者として名高いが、実際には京都の金山院をも拠点として活躍した人物であり、また「成就念仏」という独自の念仏を展開したことを明らかにできたが、この点は残念ながら追求することができず、今後の課題として残った。

次に、中世南都を代表する戒壇院の凝然に対する禅の影響を探った。凝然は華嚴宗及び律宗の系譜の上に位置づけられ、彼に対する研究は、その著作の多さゆえに、実はあまりなされていない。しかも禅の影響を正面から考察しようとした研究は殆ど存在しない。岡本一平および柳幹康が若干の言及を試みている程度である。

凝然の最初期の『八宗綱要』と晩年の『内典塵露章』とを比較して見れば、明らかに禅宗と浄土宗の項目が追加されるなど、禅宗に対する関心が増大していることが知られる。

そこで、まず凝然の初期の著作の一つであり写本も東大寺図書館に残る『梵網經』に対する注釈書である『日珠鈔』を取り上げ、そこに禅宗の影響が見られるかをまず探った。

『日珠鈔』は全部で五十巻に及ぶ大部のもので、文永十一年(1274)の戒壇院における講説をもとに建治二年(1276)から三年(1277)の一年を掛け、最終的には弘安九年(1286)に

完成をみた著作である。本書を分析するに当たり、『真心要決』でも重要な用語として使用された真心と、対照的な用語である妄心という二つの用語に焦点を当てた。真心と妄心は、地論宗の伝統に始まり華嚴教学の中でも使用された重要な用語である。この二つの用語を軸に考察を進めた。その結果、『日珠鈔』の段階ではまだ人間の心を真心と妄心という二つに分けて考察する傾向にあることを見いだした。凝然は青年期には人間の心を二分して、すなわち妄心という煩惱を伴った心が視野に入っていることを明らかにした。

ところで禅宗では真心あるいは自性清浄心が強調され、妄心に相当するものを立てない傾向にあり、「自己の本心」「本有の仏心」という句に代表されるように、妄なる心はどこにも存在しないという主張がなされるのが禅宗の特徴である。

このような観点から見れば、凝然の初期の段階すなわち『八宗綱要』や『日珠鈔』の段階では、まだ禅宗の影響は見いだし難いと言える。

次に凝然の華嚴教学に関わる著作の中から同じような傾向が言えるのかどうかを探った。凝然は、経論に対する注釈書を数多く残し、また自ら学んだ華嚴教学を纏め、綱要書を残した。それが『華嚴法界義鏡』と『華嚴宗要』の二書である。この二書は、註釈の形ではなく、自らの思想理解を表した著作として重要なものであり、前者は鎌田茂雄によって凝然の主著と位置づけられている。

まず『華嚴法界義鏡』であるが、永仁三年(1295)56歳の時の作であり、内容的には『華嚴経』を行を説く著作と位置づけ、十の観点から本經典の勝れた点を述べる。一方の『華嚴宗要』は正和三年(1314)十月に制作されたものである。凝然、75歳の時の著作であり、先の『華嚴法界義鏡』より19年後の著述になる。また彼は82歳で示寂しているので、晩年の著作でもある。

『華嚴法界義鏡』には華嚴宗の修行の形態が数多く挙げられているところに特徴がある。その中に「今、華嚴宗別教一乗は正しく定学を詮わし、専ら心観を明かす」および「(華嚴経の)一経の始末、皆、是れ定門なり」の注目される記述が存在する。これは、『華嚴経』が禅定を明かす經典であると位置づけられたことを示し、それは凝然が『円照上人行状』の中で定学と素多覽蔵とを結びつける記述をなしたこともとも符合する。この理解の背景には澄観の『随疏演義鈔』の存在が推定された。

しかし、凝然の理解がほぼ中国華嚴宗の伝統の中に収まっていると言えるかと言えば、必ずしもそうではない。たとえば観行の中でもっとも大切なものは三聖円融観と唯識観であると述べるのであるが、唯識観の中で「本来の真心、常恒の具徳、一心の業用、不思議なり」と述べ、本来の真心が一心の働きであると明確に位置づける。ここには華嚴宗

が伝統的に伝えていた真心と妄心の対比が影を潜め、真心に重点が置かれたことが認められる。

同じく法相宗の主張する阿羅耶識は「真を離れて余無きが故に識相を撰して、本覚の理に歸して以て唯識と為す」という記述や「直ちに己体を指す」「無住の心体は靈智不昧なり」などの記述からも、凝然が妄心から離れて、人間の心を理解するのに際し、真心のみに収斂する方向に変化したことが知られる。

なお「本覚の理」は華嚴宗の澄観の『随疏演義鈔』に使用された語であり、「靈智不昧」は宗密の『円覚経略疏註』に見られかつ『宗鏡録』にも用いられる語であり、また「己体を指す」は禅の「直ちに人心を指す」との記述から援用されたものと推定される。これらの点から考えれば、明らかに凝然は華嚴の伝統を踏まえた上で禅宗を取り込もうとしていることが分かる。

また、凝然の表現には良遍の『真心要決』の表現と似通ったところが認められるが、凝然自身は『円照上人行状』の中で、師の円照が「(良遍の)門室に入り法を学ぶことに非ず、法相の旨を伝え受く」と伝えるので、凝然はおそらく師の円照を介して、良遍の著作に触れていた可能性が高い。とすれば、良遍、円照を介して『宗鏡録』の影響を受けたとも推知される。

次に凝然晩年の75歳の時の著作である『華嚴宗要義』を検討した。本書も華嚴宗の宗義綱要を十項目に亘って述べたものであるが、その内容は、初期の『華嚴法界義鏡』に示された綱要とほぼ重なる。

注目されるのは「修証行相」の部分であり、そこには華嚴宗の圭峰宗密から永明延寿に継承された修行の有りよう(相状)が示されている。それは「頓悟漸修」「頓修漸悟」「頓悟頓修」「漸修漸悟」の四つである。この章では修行の行相は場合に応じて数多い(随宜多端)ことを示し、一例として「頓悟漸修」を解説する。「頓悟漸修」は、もっとも一般的に推奨される禅宗の有り様であるが、その内実は覚りの解悟(知的な理解)から修行へと進み、そして修行の結果、最終的に証悟(修行体験に裏打ちされた本来の覚り)に至ることである。

凝然は本書の中で「自心は本来即ち是れ万徳の庫蔵、染無く妄無く尽きること無く自在にして徳を具えること宛然たりと頓かに悟る、是を頓悟と名づく。此の悟りは即ち是れ解悟の悟りにして、是れ証悟に非ず。未だ修証せざるが故に」と明確に定義し、漸修によって証悟を得ることが大切だと述べる。

しかし、一方で最終的な結論は「宜しきに随いて進向すべし。意に任せて修証するものなり。華嚴の修証は縁に随い無尽なり」と述べる。華嚴宗の修証は「頓悟漸修」に限らず先に挙げた全て、すなわち「頓悟頓修」までも認める立場に立った。このような立場が生じた理由が、実は『宗鏡録』の影響であるこ

とを明らかにした。

『宗鏡録』では「頓悟頓修」は最高に優れた機根の持ち主のみに認められた修行の行相であり、しかもそれが現実であり得るものとして認めるところに特徴がある（宗密は認めない）。よって、凝然がすべての修行のありようを認めるのは間違いなく『宗鏡録』からの影響である。それは、明らかに禅宗の与えた影響と評価できる。

さらに凝然の記述の中では、妄心の比重が小さくなっていく傾向が年齢と共に認められることを指摘した。『内典塵露章』華嚴宗の項では、衆生の一心は本来、帝釈天の網の如く重重に重なっており、遍く世界を包み込んでいることを知ることが頓悟であると示している。そこには衆生の心に妄心を認めるような記述は出てこない。

また『内典塵露章』禅宗の項でも「妄念は元より無し。塵境も本より絶つ」と述べ、同じく妄念の片鱗すら存在しないと主張する。

ここに妄念を生み出す妄心は一切、不必要になったことが知られる。凝然の理解は禅宗の主張する衆生の一心が本来清浄であることを重視し、妄心を重視しない方向へ変化していた。このような変化をもたらしたものが当時伝わった禅宗、それも『宗鏡録』を中心とした円爾弁円の禅の影響であることを明らかにできたことは、大きな成果であると言える。

最後に14世紀から15世紀にかけて東大寺戒壇院の住持となった志玉の場合を検討した。『六輪一露注』は志玉の註のみを伝えるもので、『六輪一露之記』成立前のものとされる。そこに見える禅の理解は「本来無主無物」という表現が示すように、曹山本寂や宏智正覚の表現に近い。このことは、戒壇院に影響を与えた禅が、凝然の頃と志玉の頃では異なる可能性を示唆する。良遍、円照、凝然の頃には『宗鏡録』であるが、志玉においては曹洞系の資料に変化していると推測された。

志玉の華嚴理解は中国華嚴宗の澄観の注釈書である『華嚴経疏』や『華嚴経随疏演義鈔』にあることは指摘できるが、禅の影響が、曹洞宗的になった理由は明確には知られない。なお、世阿弥が菩提寺とした補巖寺が曹洞系であったことが知られており、その影響が推定されるが、今後の課題として残さざるを得なかった。

以上、本研究の最終的な結論を纏めれば以下になる。13～14世紀にかけては東福寺円爾弁円の影響が大きく、かつまた『宗鏡録』の影響が大きいこと、また、その影響下に南都僧が自らの言葉で悟りを表現するようになったことや禅宗の遮詮的な表現が見られるようになったこと、伝統的な南都の法相教学や華嚴経学に、本来清浄なる「真心」理解の影響が見られ、それぞれが自性清浄なる心を強調する方向性を生み出し、迷いを説明する妄心の比重が相対的に低下したこと、

修行に対する関心を大いに惹起し、頓悟頓修を含めて、あらゆる修行を認めるという凝然の立場が生まれたことなどである。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 4 件)

研究論文(学術雑誌に既に掲載されたもののみ)

(1)「中世東大寺僧に見る禅宗の影響 凝然の場合」『印度学仏教学研究』62-2(132), 査読有り, 2014,3, pp.167-174.

(2)「良遍の『真心要決』と禅」『印度学仏教学研究』61-2, 査読有り, 2013, 3, pp.1-10.

(3)「<仏教学>再考-教理研究と修行実践」『日本仏教総合研究』10,日本仏教総合研究会, 2012.5, 査読有り, pp.147-166.

(4)「法勝寺御八講問答記にみる論義再考」『印度学仏教学研究』60-2, 査読有り, 2012, pp.162-168.

〔学会発表〕(計 7 件)

平成 25 年度

(1)MINOWA KENRYO, The Influence of the Zen school on the Monks of the Southern Capital, Nara: Focusing on Ryōhen, Enshō and Gyōnen, SOAS Centre for the Study of Japanese Religions/University of Tokyo, International Workshop, Intersectarian Relations in Medieval Japan: New findings in the study of medieval Buddhist sources, At the SOAS Brunei Gallery, 2014.2.24.

(2)菘輪顕量「中世南都の僧侶に与えた禅宗の影響」, 東アジア仏教研究会第12回年次大会, 於駒澤大学 246号会館, 2013.12.7.

(3)菘輪顕量「寺僧と遁世門の活躍ー戒律・禅・浄土の視点から」, 東大寺総合文化センター主催・GBS(グレイトブッダ・シンポジウム), 於東大寺総合文化センター, 2013.11.23.

(4)菘輪顕量「中世禅宗の南都僧に与えた影響ー凝然の場合」, 日本印度学仏教学会第六十四回学術大会, 於島根県民会館, 2013.9.1.

(5)菘輪顕量「中国禅宗の中世日本へ与えた影響ー法相・華嚴における受容ー」, 仏光大学

仏教研究中心開幕検討会(国際研究集会), 於
仏光山/仏光大学・高雄/宜蘭 台湾, 2013.4.17.
平成 24 年度

(6) 衰輪顕量「良遍の『真心要決』と禅」, 日
本印度学仏教学会第六十三回学術大会, 於鶴
見大学, 2012.8.31.

平成 23 年度

(7) 衰輪顕量「『法性寺御八講問答記』に見る
論義再考」, 日本印度学仏教学会第六十二回
学術大会, 於龍谷大学, 2011.9.8.

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕
出願状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等
なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

衰輪 顕量(MINOWA, KENRYO)
東京大学・大学院人文社会系研究科・教授
研究者番号：3 0 2 6 1 1 3 4

(2) 研究分担者

なし

研究者番号：

(3) 連携研究者

なし

研究者番号：